



↑中元寺川の河川敷に沿うようにして、およそ300メートルにわたって列をなす桜並木。菜の花とのコントラストが圧巻。

成竹架道付近の桜並木

金田

西村厚輝さん

旅立ちの桜

この春、金沢学院大学に進学し、バドミントンプレイヤーとして福智町から羽ばたく西村厚輝さん（神崎・南木）十八歳。小学校一年生からバドミントンに打ち込み、インターハイや国体にも出場するなど、全国を舞台に活躍しています。



金田体育館から見えるこの桜並木は、西村さんが小中学校の九年間、バドミントンクラブのロードワークや部活動の行き帰りで眺めた風景です。普段は物静かな雰囲気ですが、春になると黄色い菜の花のじゅうたんに薄桃色の桜が咲き乱れ、目の前が鮮やかに染まります。そんな一年間のわずかな間、西村さんはいつもより



桜並木は、金田体育館をはじめ、武道館や保健センターなど金田駅裏の公共施設から見える。

心弾ませて練習に汗を流せたといいます。「この桜が咲くころ、ぼくは金沢で新しい生活をスタートしています。厳しい練習の毎日でありますが、美しいふるさとの景色と体育館でたくさんさんの仲間とシャトルを追った日々を胸に、大好きなバドミントンでもう「花咲かせたい」と、西村さんは並木を見上げて決意を語りました。「金田体育館はぼくの原点。ここでの楽しい毎日があったから、ずっとバドミントンを辞めずに続けてこれました。だから、ここでラケットを握るたくさんさんの後輩たちにもバドミントンを思いっきり楽しんで、もっともっと好きになって続けて欲しい」。桜の開花を待つ菜の花のじゅうたんに目を眺めながら、西村さんは笑顔でふるさとの子どもたちにエールを送りました。

励ましてくれた桜

四年前、福岡県と金田町との間で行われた人事交流に「見識を深めるチャンス」と、自ら名乗りを上げた真鍋孝博さん（筑紫野市）三十二歳。人一倍のやる気と少しの不安を胸に、初めて金田の地を踏みました。そんな見知らぬ地で働く真鍋さんの不安を一気にかき消してくれたのが、このふれあい公園の桜でした。

「金田町がわたしを最初に迎えてくれた景色でした。車の窓から目の前一面に広がる桜の美しさは、今でも忘れられません」。桜が呼び寄せた緑なのか、その後、真鍋さんは町内の公園管理などを担当する企画係に配属されました。「公園で初めて会う人と言葉を交わしたり、親子連れが遊んでいる表情を見て『気持ちよく使ってもらっている』という反応をじかに感じる事ができました」と真鍋さん。合併を控えた金田町で、その一員となつて働いた貴重な二年間は、現場ならではの苦労、人に接し、ふれあいことの大切さを教えてくれました。この経験で、ひとまわり大きく成長した真鍋さんは、地域への強い愛着を胸に金田町をあとにしました。彼は、今も桜の時期になると、四年前に初めて見たふれあい公園の桜と、地域の人々に支えられて過ごした日々を昨日のこのように思い出すといいます。



【B & G海洋センター】や「日王の湯」付近の高台から広がる「金田ふれあいスポーツ公園」。

ふれあい公園の桜

神崎

そして、あのととき自分を勇気づけてくれた桜のように「たくさんさんの経験を積んで、人や地域を元気にできる行政マンになりたい」と、今は県から研究員として九州大学に派遣され、伊都キャンパスで産学連携を担当しています。「第二のふるさと福智町に恩返しをしたい」という思いを胸に、目の前の仕事にベストを尽くす真鍋さんの毎日は、今も続いています。

真鍋孝博さん



↑見晴らしの良い多目的グラウンドを囲むようにして、遊歩道には鮮やかな桜のトンネルが続く。

←全体におよそ1千本の桜が植えられているというふれあい公園。斜面にはソメイヨシノではなく山桜が植えられている。

